

JIPPO&DIC 共同企画  
ネパール スタディツアー  
**ネパール在住チベット難民の学校と  
人権擁護施設を訪ねる**

2018年3月3日(土)~10日(土) 8日間

**報告書**



## 目次

- 1 日程表 . . . . . 2
- 2 参加者名簿 . . . . . 3
- 3 感想文 . . . . . 4



スワヤンプナート

# 1 日程表

日次	月日(曜)	地名	現地時刻	内容 (宿泊地)
1	3月3日 (土)	関西空港集合 関西空港発 インチョン国際空港着 インチョン国際空港発 トリバン国際空港着	07:30 09:30 11:25 13:35 18:05	団体カウンター集合、チェックイン 仁川へ(所要時間2時間) 乗換、結団式 カトマンズへ(所要時間7時間半) 日本時間21:20着 入国審査、両替、現地ガイドと合流し、ホテルへ (カトマンズ/ホテルターメル泊)
2	3月4日 (日)	カトマンズ ゴカルナ	07:00 09:00 09:55  12:00 19:00	朝食 ゴカルナへ移動 チベット難民の学校「ナンギャル高等学校」着 ノブテスリン校長、スノーライオンファンデーションのテスリン トプギャルさん、中原さんから学校やチベット難民の現状を聞く 施設見学、昼食、交流、学校寮宿泊 夕食 (ゴカルナ/ナンギャル高等学校寮泊)
3	3月5日 (月)	ゴカルナ スワヤンブ ボウダ	07:00  08:45 09:45  11:45 12:15  14:20 16:00	朝食 教室見学 ナンギャル高等学校発 カトマンズ バウダ地区へ移動 チベット難民の学校「ソンチェン ブリクティ寄宿学校」着 ペアレンツデー 見学 ソンチェンブリクティ寄宿学校発 昼食(ボダナート)(Best View Restaurant & Bar.Ltd) ボダナート見学 Mahayana Buhhist Progressive Education Center 訪問 ボダナート発 ホテル戻 (カトマンズ/ホテルターメル泊)
4	3月6日 (火)	ターメル カトマンズ  ターメル	07:00 10:15 11:15 13:00 14:30 15:30 16:00 17:45 19:30	朝食 ホテル発 人身売買被害の当事者団体「シャクティ サムハ」訪問 昼食(The Bakery Café) シャクティ・サムハ シェルター訪問 シェルター発 「カトマンズ本願寺」表敬訪問 ホテル戻、ターメル地区散策 夕食 (カトマンズ/ホテルターメル泊)
5	3月7日 (水)	ターメル ダルバール マールグ カトマンズ ターメル	07:00 10:00 11:00 11:45 13:00 13:45 15:00 16:00 16:45 17:45 21:00	朝食 ホテル発 ルート ネパール トレーダーズ(買い物) 昼食(Opium Restaurant) ルンタプロジェクト中原さんの事務所訪問 事務所発 HIV/AIDS 支援団体「シャクティ ミランサマージュ」訪問 ミラン・サマージュ発 ホテル戻 ミラン・サマージュの入所者と夕食 (Electric Pagoda) ホテル戻 (カトマンズ/ホテルターメル泊)
6	3月8日 (木)	ターメル パタン  カトマンズ ターメル	07:00 09:35 10:05 10:45 11:00  12:15 13:30 15:00 19:00	朝食 ホテル発 スノーライオン財団事務所訪問 Atisha Primary School 見学 チベット難民キャンプのカーペット工場 Jawalakhel Handicraft center 見学 昼食(Patan Royal Café) Yala Mandala(買い物) ホテル戻 ターメル地区買い物 夕食(世界女性デー) (カトマンズ/ホテルターメル泊)

7	3月9日 (金)	タ ー メ ル	07:00	朝食
		カ ト マ ン ズ	10:00	ホテル発 【世界遺産】市内見学
			10:30	パシュパティナート見学
			11:45	昼食 (Hotel Kido House)
		タ パ タ リ	13:10	スワヤンブナート見学
ス ワ ヤ ン ブ	13:50	ダルバールスクエア、旧王宮		
		クマリ寺院		
		タ ー メ ル	15:15	ハンバーガーショップ
		カ ト マ ン ズ 発	16:30	ホテル発 空港へ
		トリブバン国際空港発	20:30	カトマンズ発 (機中泊)
8	3月10日 (土)	インチョン国際空港着	05:30	空路、韓国乗り継ぎ、大阪へ
		インチョン国際空港発	09:00	
		関西空港着	10:45	到着後、解散

## 2 参加者名簿

齊藤 規乃  
 新藤 健次  
 筈廣 啓史  
 長嶋 修子  
 林 敬子  
 定光 大燈  
 高木 美智代

### 3 感想文

JIPPO&DIC 協同企画 ネパール・スタディツアー  
ネパール在住チベット難民の学校と人権擁護施設を訪ねる  
2018年3月3日～10日 8日間  
ツアーの実施報告とその感想  
DIC 定光 大燈

#### 1、 ツアー実施に至る経過

龍谷大学のアジア仏教文化研究センターの博士研究員の桑原昭信氏の方から2016年12月の予定で実践真宗学の大学院生を対象とした講演の依頼があった。その依頼の内容はDICが続けているチベット難民の支援活動について話してほしい、というものであった。この講演会は本山NGOのJIPPOが小生を推薦されたということであった。そして、12月16日(水)に、龍谷大学大宮学舎にて「ネパール在住チベット難民の現状とその問題」DICの支援活動を通して見えてきたこと、という講題で講演をさせて頂いた。

その講演の後に、JIPPOの事務局、高木美智代氏から龍谷大学の大学院生を対象として、チベット難民の学校を訪問するスタディツアーを実現したらどうだろうかという相談があった。JIPPOとDICの協同で実施する計画を立て、計画の主旨を説明するために本山社会部部长でJIPPOの事務局長森田順照氏、社会部社会事業担当の本田智昭氏とJIPPOの中村専務理事、高木氏を含めた会議を2017年3月15日に本山宗務所で持った。この会議の設定に協力していただいたのが、山下義円備後教区宗会議員である。この時の話し合いの結果、実施計画をJIPPOで立てていただき、日程・訪問先などは、対象が龍谷大学の大学院生なので文学部の若原雄昭教授(JIPPO理事)に計画の段階からご意見もいただいて、ツアーの原案を作成することになった。

2017年6月になって、スタディツアーを実施するためにネパールの現地を訪問し、チベット難民の学校にこのツアーの主旨を説明して了解を求めた。その結果、参加者を寮に宿泊、難民の生徒たちと交流することの許可を得て、日程の調整もした。また同じチベット難民の支援をしている「ルンタプロジェクト」の中原一博代表とネパールで再会、彼が昨年からは支援を始めたネパール人の人身売買の被害女性たちの社会復帰施設を訪問することもツアーのなかに入れることのできた。

日本に帰国して、JIPPOの事務所で2018年3月に実施することをJIPPOで企画していただくことになった。その後9月に実施要項がJTBの方で準備され、スタディツアーの募集ちらし(資料として添付)を作成し龍谷大学のみならず多方面に配布して募

集を始めた。

## 2、 ツアー参加者の募集

2017年9月から正式にパンフレットをもとにスタディツアーの参加者を募集したが締め切り(2018年1月15日)近くなっても人数が揃わなかった。前出の宗会議員、山下義円氏にもお願いして、本願寺職員の参加も働きかけていただいたし、2018年1月9日に御正忌報恩講の初日にお参りした際に、社会部や本願寺出版社にも訪問して参加を呼び掛けた。そうした効果もなく、参加者が6人(JIPPO関係者、同会員2人、DIC関係者3人)。その後、JTBの方に京都女子大の学生が1名申し込んでいることがわかり、結果、7名でこのスタディツアーが実施された。

## 3、 チベット難民の学校訪問

2018年3月3日ネパールの首都カトマンズに到着、次の日の午前中にカトマンズ北東の郊外のゴカルナにある、Namgyal Higher Secondary Schoolという学校を訪問。この日はこの学校の寮に泊まることになっている。まず校長室に案内され、この学校の概要の説明を受けた。そして学校全体を案内していただいて昼から講堂で交流会を開催した。学生たちのチベット伝統舞踊のパフォーマンスを拝見し、こちらは折り紙の紹介、外でのバドミントンなどで交流することが出来た。

この学校は2年前にネパール全土で行われる12年生の大学受験のための資格試験(Higher Secondary Education Board Examination)の平均が全国三位になるなど教育に熱心な学校である。チベット難民の子供たちは教育を受ける意味と価値を小さい時から教えられているし、インド・ネパールのチベット難民社会はダライ・ラマ法王の教えを受けて、チベット伝統文化を継承するための学校の重要性を十分に理解している。中国占領下のチベットでは中国語で教育を受けているので、言語としてのチベット語や仏教の教えに基づいた伝統文化が急速に失われて来ている。チベット語や文化を伝承・継続のためにも難民社会の学校教育が非常に大切なのである。



しかし、ネパールでは経済的にも政治的にも中国の影響が強くなってきて、チベット難民社会に対しての圧迫感が大人だけでなく子供たちにも感じられるようになってきている。校長先生が、「どんなにいい教育を受けてもネパールではいい仕事も見つけれないし、ネパールから出たい生徒が増加している」と深刻な表情で話された。両親が難民証明書(RC)を持っていると、自動的に子供も18歳で取得できるが、大人が色々政治的な圧力でこの証明書を失うケースが多くなっている状況で、将来を不安視している生徒が多いということである。

そのような状況下でも、明るく集団で寮生活をしているこの学校の生徒たちは、向学心が高いし、4か国語に通じる生徒が多い。学校教育は英語で行われ、チベット語やネパール語が授業科目にある。またインドの映画やドラマを日常的にみることが出来るのでヒンディー語も理解したり話すことが出来る子もいるという。

また3月5日に、もう一つのチベット難民の学校(Srongtsen Bhrikuti Boading High School)を訪問した。ちょうどこの日はダライ・ラマ法王のお母様の記念日で、学校全体で親と生徒の交流会が開催されていた。壇上にダライ・ラマ法王のお母様の写真が飾られていて、ろうそくの灯をともし、カタという白い布をお供えする伝統的な儀式をしたあと、校長先生、主任の先生などの挨拶があり、生徒たちの踊りを紹介するパフォーマンスがあった。



校長先生や主任の先生のこの時の挨拶の中で、「学校で教育を受けられるのは両親のお陰であることを理解し、感謝するように・・・」と話しておられたのが耳に残っている。この行事のあと先生方と一緒に集合写真を撮り、校長先生の部屋で学校の概要などのお話を聞いた。その中で特に印象的であったのが次のようなことである。「チベット難民の学校の中で、ネパールを襲った地震の被害がこの学校が一番大きかった。正面の大きな校舎が地震により大きくひびが入った。でもちょうど生徒全員は外にいたので、誰も地震によって傷つくものはいなかった。ヨーロッパの支援団体の緊急の支援で校舎はすぐに修復された」と。

ヨーロッパの支援団体とはフランス、ベルギーなどのキリスト教系の団体である。同じ仏教徒が支援していない恥ずかしさを感じながら、もう一度仏教徒の連帯というものを考え直さなければいけない、と感じた。

こうしたチベット難民の学校は確かにいろいろなところから支援を受けて成り立っている。しかし教育資材も環境も日本に比べるとまだ十分ではない。思いを日本に向けると、環境のいい学校教育の中に甘んじている今の日本の状況に「もったいない」という思いが沸き上がった今回の交流会であった。

#### 4、 人身売買被害者ネパール人女性の社会復帰を目指した自立支援訪問

3月6日に訪問した Shakti Samuha は、1996年に人身売買の被害者によって設立された自立支援団体で、インドやその他の国から救済されてネパールへもどってきた女性の保護や法律援助、職業訓練、カウンセリングが等を提供して心身共に社会復帰できるように支援している。この団体から分かれて作られた組織、Shakuti Milan Samaj は保護された女性の中で HIV に感染した女性と子供たちを別な施設に保護して、社会的な差別や暴力から守り、医療を受けられる援助、教育や経済的な支援もしている。

この二つの組織を支援している「ルンタプロジェクト」の代表中原一博氏の活動を視察し、その支援のあり方を学ぶのがこのツアーの目的の一つでもあった。

中原氏は建築家で、チベット寺院の建築に詳しく、インドのダラムサーラにあるチベット亡命政府の要望でインドやヨーロッパにチベット寺院の設計図を作成していた。そのようなときにチベットから亡命してくる人々、その中で特に政治犯で長期間投獄された亡命者に手を差し伸べたことから「ルンタプロジェクト」を立ち上げて支援に乗り出して20年以上も経過している。

2015年4月にネパールの大地震が発生した後、中原氏は亡命政府の依頼を受けて、ヒマラヤ山間地区の寺院(チベット仏教寺院)が被害を受け、地震による破損状況の調査にヒマラヤに行った。その折に山間地区の貧しいネパール人の家庭に起こっている人身売買の事実とその深刻性を知ることになって、インド・ダラムサーラからカトマンズに住居を移して上記二つの支援団体に関わり、その団体に支援は始めた。

Shakuti Samuha は、人身売買の被害女性が救出されてネパールへもどったときに、安心として住める場所を提供し、健康チェック、精神的ケアなどを施し、その上で自立



した生計を立てるための職業訓練を提供している組織である。ルンタの活動をホームページで知った日本人女性がショールを作るための機織りから染色までの指導をされている。中原さんはインドの売春街に潜入、インドの救出団体と協力して先月15人を連れ出したという。私たちスタディツアーのメンバーが Shakuti Samuha のスタ



ップからの説明を受けているときに、中原氏が救出した女性の中で一週間前にこの施設にきている女性に会いたいと要望。上の階から私たちが会議をしている部屋に赴いてくれた。名前や出身地以外多くは聞けないと言う中原氏からの質問に終始涙を流しながら答えていたこの女性は 17 歳だったと思う。解放された喜びの涙なのか、辛い経験を思い出しての涙なのかと想像しながらその会話を聞いていた。

次の日の 3 月 7 日、Shakuti Milan Samaji の共同生活をしている施設訪問し交流会をもった。この組織は、Shakuti Samuha から分離した組織で、被害者女性の中で HIV・AIDS に感染している女性とその子供たちを保護し、差別や暴力から守り、保健医療へのアクセスなどの援助をしている。

このツアーで、中原氏のプロジェクトで支援を始めたこの施設の母子が安心して生活できる現在建設中の施設を訪問する予定であった。しかしネパールの事情は予定通り進まないことが多いのである。建設中の施設はカトマンズ郊外の少し田舎であってそこに行くメインの道路が工事中で封鎖されていた。山道を通る回路で行くと、がたがた道を往復 5 時間以上かかる、という。予定を変えて中原氏の住居、HIV/AIDS キャリアの母子が共同生活をしている施設、そして夜の食事にカトマンズの繁華街に施設の方を招待することになった。中原氏の住居には植物の鉢がたくさんあって、新しい建設中の施設で育て、販売が出来るような花や植物などを試験的に育てておられた。また部屋でパソコンの映像ではあったが、インドの首都ニューデリーの北、デリー駅の近くの売春街に潜入した映像を見た。眼鏡に秘めたカメラレンズで撮った映像なので鮮明ではなく、また頭を動かすスピードで映像が動くのでとても見にくいものではあったが、イメージはとらえることが出来た。とても女性たちが自力で逃げ出すことが不可能な構造であった。インドの NGO や警察などの協力を得ているとはいえ、リスクの高い救出の仕事だと思った。

共同生活をしている施設では、皆さんが踊りを紹介したり、糸を折る機会を使ってパシュミナのショールを作る糸を引くパフォーマンスを見せてくれた。その後夕食を共にするために移動、私たちが宿泊しているホテルの近くのレストランで一緒に夕食をした。ライブの演奏もあり、とても楽しい夕食会であった。施設の皆さんはほとんどが外のレストランで食事をしたことのない経験がないということなので、とても喜んでいただいた。こうした交流を通して施設の皆さんが外国からも人身売買という人権侵害の事実に関心をもっているものがあるということが力になって、孤立や孤独感から一日でも解放されることを願わずにはおれなかった。それにしても中原氏の活動は称賛に値する活動であり、多くの方に知っていただくことが大事だと改めて感じた。

昨年 6 月にネパールを訪問した際に、郊外の建設中の施設にはまだ費用が足りないとお話であり、このツアーを引き受けていただいたことで協力をしたいと思って、私も個人的に寄付をして色々な方をお願いもした。本願寺派は大きな組織であり寄付の依頼の手続きも簡単ではない。何よりもこうしたことに関心を示すところは JIPPO でしか

ないのも事実である。どうしても中原氏の活動に協力をしたいと思って、龍谷大学時代の友人が管長をしている東大寺を訪問、寄付のお願いをしてみた。昨年 12 月に東大寺として、そして管長の狭川普文氏も個人的に「ルンタ」の口座に寄付を振り込んでいただいた。中原氏もとても喜ばれていた。

人身売買という人権を無視した行為はとても大きな組織で行われているのだろう。そうした組織がある国が避難されるべき事である。しかしなくならないのが現実である。その根本には「貧困」という差別の実態が生み出す社会構造が存在する。今回の訪問でネパールを襲った大地震がその人身売買の拍車をかけている事実を教えられた。山間地区の貧困な家庭に忍び寄るそうした組織があることを「ルンタ」の現地従業員のゴクールさんが語ってくれた。さらにネパールの闇の部分も教えていただいた。それはカトマンズで救出された人身売買の女性の中には、インドパンジャブ地方から連れ出された女性、スリランカから来た女性などいたという。カトマンズが人身売買の「ハブ空港」的役割を果たしているのか、と気の遠くなる気持ちになった。

## 5、 そのほかの訪問予定先

カトマンズ本願寺に表敬訪問するという事で、本願寺国際部から連絡をしていたが 3 月 6 日午後 2 時訪問の予定であった。この日はパキスタンの大統領がカトマンズに来ているということで、町中が渋滞していた。それも一つの遅れの原因でもあるが、ネパールの観光会社の車が現地の道路工事や道順などよく知らなかったために、2 時間遅れで訪問。本堂でお勤めをされている最中に到着。本堂に少し参拝して、ソナムご住職とはご挨拶なしで、高木氏と一緒に事務所に立ち寄るだけになった。また龍谷大学の若原教授の勧めで、ルンビニ大学カトマンズ事務所も表敬訪問の予定であったが、3 月 8 日は「国際女性デー」で休日。事務所も休みであったため訪問が出来なかった。

## 6、 スタディツアーの全体を通しての感想

2017 年 10 月 18 日に、第六回宗門教学会議が開催された。テーマが、「誰一人取り残さない——本願寺派 xSDGs」だった。ご門主のご親教の中に「人類の生存にかかわる世界規模の課題に取り組む実践運動の推進を通して自他ともに心豊かな社会の実現を目指す」指針がもとでの会議であったように聞いていた。(その報告が今年になって宗報 1 月号・2 月号に掲載されて、内容を知ることができた)

今回のスタディツアーには二つの学びを目的としていた。一つは政治的な迫害で国を捨てたネパール在住のチベット難民 (Tibetan Refugee) がネパールで Refuge (避難場所・安全なところ) を失いつつある状況。もう一つはネパールの女性が人身売買の

犠牲となっていることの実と、運よく救済されてネパールへ帰った女性が自立している姿を学ぶことであった。

ネパールという国は長い間続いた国王の政治が終焉し、現在の政権は政治的にも経済的にも中国の影響を大きく受けることになっている。そのことでチベット難民の生活が中国政府の思惑通りの政策により、以前と違って不安定になってきている。難民として滞在できる許可証(Refugee Card)が1年ごとの申請で再発行してもらえないケースが多くなってきている。そうした大人の状況が子供たちに与える心理的影響がとても大きくなってきているようだ。訪問先の学校の生徒たちはネットの情報で世界の出来事を知ることが出来る。多くのチベット難民がヨーロッパやアメリカなどに移住していく情報を聞くにつれ、自分たちの将来を「取り残されている」と不安視している状況がとても心配である。

また人身売買被害者のネパール人女性たちが約20万人インドなど海外において性産業で働いているという。その中で救済される女性たちはごくわずかな人数だという。取り残された多くの女性たちが保護、救済されることはとても難しいことである。中原氏の活動から教えられることは、現在も取り残された女性がたくさんいて、日本にいる私たちに何一つもできないという事実を突きつけられた今回のスタディツアーであった。

今回のスタディツアーを実施するにあたって、本山社会部や本願寺出版社のどなたかに参加していただき、「貧困」がいかに人権被害を生む土壌があることの学びをとものにしたいと協力をお願いしたが、実現しなかった。

山下義円備後教区宗会議員の第313回定期集会の報告を読むと、重点プロジェクト(実践目標)に、「貧困の克服にむけて～Dana for Peace～子供たちをはぐくむために」と実践目標を定めたと報告している。宗門が一体感をもって同じ宗門人が実施した今回のスタディツアーを支援していたら、このツアーを通して、貧困による人権被害に苦しむ女性に支援している団体を知る念仏者が増えることになり、その活動している団体を支援することで、実践運動のさらなる広がりを見せることになる。しかし、大きな広がりを見せても取り残される人は多くいるのが現実である。現時点でも「取り残されている」(光があたっていない)多くの人権被害を受けている方々に思いを寄せて、いかに宗門の実践運動を展開していくかを考えさせられたツアーだったと思う。



## 齊藤 規乃

私は今回、初めて JIPPO ツアーに参加しました。8 日間という限られた期間ではありましたが、有意義な時間を過ごせたことに大変満足しています。

来年度からの大学院での研究内容を絞るためにネパールツアーへの参加を決めましたが、実際には研究対象を決めること以上に、ネパールという国で人々を支援するとはどういうことか、支援とは何であるかを考える機会になりました。また、現地で支援を行っている方々の活動や経験を聞き、自分の目で見ることで、将来の具体的なビジョンを持つことが出来ました。今回は主に、そうした経験を「支援」という言葉に絞って述べていきます。

私たちが訪れたネパールは、このツアーのテーマである難民、人身売買、HIV/AIDS に加え、更に災害という社会的な問題を多く抱えている国ではありましたが、国、コミュニティ、個人レベルで取り組みが十分に行われていないにも関わらず、既に風化しつつあるということを知りました。チベット難民の学校を訪れた際、2015 年に地震が起きた後に UNCHR が支援に来たものの、連携や継続的な支援があるわけではないということを聞きました。私たちが目にする情報は、殆どの場合、政府や国連などの大きな組織による交渉や支援の様子だと思います。しかしながら、実際にそうした大規模な国際組織が行う支援活動が、結果として出るまでには長い期間を要することはさておき、どのように、どのようなかたちで当事者と呼ばれる人々に行き届いているかまで取り上げられることは滅多にありません。今回関わることができた多くの方々には、そうした問題のまさに当事者と呼ばれる人々でしたが、「支援を受ける」というよりも、彼らが主体となり、自ら尊厳を取り戻すための活動を積極的に行っていました。当事者の視点に立った時に、支援を行う側がどうあるべきかを自分なりに考えましたし、また、支援を受ける側の意志がなければ支援が成り立たないということを実感しました。

この8 日間で得たものは沢山ありますが、なかでも人との繋がりが出来たことは、とても大きな収穫であったと感じています。私が日本に帰国した後も、Facebook や Messenger を活用してお互いの近況を話し合ったり、ネパール語を毎日教えてくれたりととても親切で、今後も続けていける関係を築けていることを本当に嬉しく思っています。事前にもっとネパール語を学んでおけば良かった、と反省する点もありますが、それも今後の勉学の励みになりますし、具体的な研究計画も立てることが出来ました。今回のツアーに携わって下さったすべての方々に、感謝致します。有り難うございました。



## JIPPO ネパールツアー

新藤 健次

鼓膜に気圧の変化を感じて、旋回を始めた飛行機の窓を覗くと雲海の彼方に、エベレストが望める。

雲を頂いたヒマラヤ山脈は、神々しく仏陀の説く須弥山も然も有りなんと、その志向を彷彿する。

ネパール着二日目、カトマンズに在るチベット難民学校「ナンギャル高等学校」を、翌日は「ソンチェン・プリクティ寄宿学校」を訪問して、生徒達と一泊二日を過ごし、彼らの学力の高さ(彼らは英語、チベット語、ネパール語、ヒンディー語を操り、数学は日本の高校と同じレベルか、それ以上)とチベット文化を何とか残して行きたいとの思いに胸を打たれる。チベットは今、中国占領下での政策により、中国語教育と中華思想を強要され、チベット語も仏教文化も失われつつ在る、との事でした。

そのような中、ネパールでは 2006 年ギャネンドラ国王失脚の政権交代が起こり、中国からの外圧と中国肝煎のマオイスト(毛沢東思想者)の政治参入で、チベット難民の子供達は「難民証明書」を取得できなくなる事が多く成り、将来への不安からネパールを出たいと思う様に成っているとの話でした。

4日～5日目

人身売買被害者団体「シャクティ・サムハ」とHIV・AIDS支援団体「シャクティ・ミラン・サマージュ」を訪問する。

この二つのプロジェクトを20年以上支援し、自ら「ルンタ・プロジェクト」を立ち上げられている、中原一博氏に、その活動と支援の在り方を学ばせていただいた。

「シャクティ・サムハ」は、十代で騙され、あるいは誘拐されて売られて、1996年に売春宿から救出された、人身売買の被害者が、自ら立ち上げた自立支援団体で、メンバーと中原氏から現在でも年間七千人の被害者が出ていることや、被害者は一日に30人

もの客に売春を強要され、その20%がエイズに感染しているなど、血も凍る様な事を知らされた。

一カ月前に救出された、17歳の少女と面会する事が出来た。写真も話しかけもNGOの短い面会だけだったけど、小柄でリスのような瞳をした少女は、安心しているのか、涙の中にハニカミながらも少し笑顔を見せてくれたのは嬉しかった。



「シャクティ・ミラン・サマージュ」は「シャクティ・サムハ」から独立したエイズ感染者と、その子供達の共同生活施設で、中原氏はこの施設の母子が安心して暮らせる農業基盤の自立施設を現在建設中で、訪問予定でしたが少し田舎の為、道路工事で通行不能で中止と成りましたが、母子らの中原氏への信頼は高く、氏と共にレストランに食事をと招待すると、エイズと言う病気柄人前に出ることを嫌う彼女らも喜んで来て、とても楽しんでくれました。私にとってもツアー一番の思い出となりました。



六日目はルンビニ大学訪問の予定でしたが、休日閉館と言う事で中止と成り、チベット難民支援団体「スノー・ライオン」を訪問しました。ネパールに於いて、通行止めや休日は普通のトラブルで、予定は未定、不安定と言う今回のツアーでした。

ヒマラヤ山脈を背中に荷を積んだヤクが通り抜けていた細道を中国からネパールに向けて、トラックに積み込まれた物資とマオイズムが、雪解け水の如く流れ込んでいます。

根強く残るカースト制度、限り無い汚職と貧困、追い討ちを掛ける自身災害。

中国とインドの間に在って、ネパールは何処に流されるのでしょうか。

この度、カトマンズに降りて、視界を覆う埃と雲で、一度としてヒマラヤ山脈も南十字星も望むことは有りませんでした。

何時かブッダの教えが法灯明として彼らに届く事を願わずにはいられませんでした。ネパールはゴータマ・ブッダ誕生の地、なのですから。

仏教者として、とても有意義なツアーを有り難う御座いました。



## 初めてのネパール、スタディツアーとして 告廣 啓史

JIPPO のスタディツアーは 2 度目の参加です。昨年の 4 月、福島県の南相馬市で開催された「菜の花サミット」に参加しました。福島駅集合、解散の 2 泊 3 日のツアーでした。関係団体による準備も行き届いており、充実したスタディツアーでした。

対して今回のスタディツアーは、もっと改善すればと良いと思える箇所も多々あり、人によって見方、とらえ方は異なると思いますが、自分にとってちょっと残念であったというのが正直なところではあります。

最も大きなのは、今回、いただいた資料の中に「人権擁護団体の施設では、ネパール社会の格差・貧困からくる人身売買の現実を知り、被害者の社会復帰を支援する団体の活動を通して、社会に対する実践活動を学びます。特に HIV/AIDE による差別問題に直面している女性たちのシェルターを訪問することによって社会に巣くう問題を考えることが出来ます。」

下線の 2 つが人権に関わる施設を訪問する目的です。他の参加者の思いはわかりませんが、自分としては、実際はこの目的からはほど遠かったというのが本音です。

とりわけ、HIV/AIDE 施設では、何の説明もなく、確かに踊りとかは見せていただきましたが、どんな活動をされているのか、現状も課題も何人の方がおられるのかも、何もわかりませんでした。

さて、到着の翌日、初めての訪問地、ナンギャル高等学校です。あいにくストライキと重なって先生方はほとんど不在でしたが、生徒たちの学習や活動の場面を見学できたのは良かったです。

事前に JIPPO の事務所に行ったときに、気になっていたこの学校の学生寮の宿泊について「カトマンズから遠隔の地」なら寮に泊まるのもやむを得ないが、同一のホテルに連泊できないかと質問しました。確か答えは、参加者の中に学生がいた場合は、学生間の交流があるので寮での宿泊と言われました。実際に学生の参加があり、寮に泊まることになったのですが、交流は昼間にあり、夜は何もありませんでした。シャワーを浴びることもなく、停電で真っ暗なネパール式のトイレを借りた懐中電灯で利用し、さほど広くない部屋に、服やズボンを架ける場所もなく、何人かの生徒と一緒に一夜を過ごしました。若い時ならいざしらず、高齢者の一員となって、後、体調は大丈夫か、心配になりました。そして何といても泊まらなくてはならない必然性があるのなら問題ないですが、何の活動もなく、中心となる方はどこかに行かれて不在で、何も聞けず、ホテルに十分戻れるのに、この日程は理解できませんでした。

交流について、事前に折り紙で「鶴」を教えることなどを相談しました。しばらくすると交流の場に案内されました。そこには全校の生徒がいました。折り紙から少人数単位のグループのような交流を思っていました、実際は異なりました。紙飛行機等で楽し

くは過ごせましたが、多分、交流の規模や時間について参加者は誰も知らなかったのではないのでしょうか。

翌日、ナンギャル高等学校から次の訪問地、ソンチェン プリクティ寄宿学校へ直接の移動でした。到着すると校舎前の広場で集会が行われていて、子ども



たちの後ろに用意された椅子に横一列で座り、集会の様子を見学しました。

ここでこそ、授業で子どもたちの様子を参観したいと希望していましたが、集会の後、校長室に案内されただけで、子どもたちも下校しました。当初いただいた案内にはネパール人も学び、木工・洋裁の職業訓練も行っている学校とあったのに、その一端も参観できませんでした。まさか、集会だけを見学することが、このツアーの目的ではないはずです。訪問日を含めて事前の調整がどうなっていたのか疑問を感じました。

ソンチェン プリクティ寄宿学校からの帰路、昼食場所でもあったボダナートを見学しました。自分は最終日まで、ガイドブックの写真を見て、最終日に見学したスワヤンブナートとっていました。しかし、ガイドブックに書かれている説明文と状況が異なるので、おかしいとは思っていました。まさか、同じような建物が2つあるとは思いませんでした。

ガイドさんは質問すれば答えてくれるのですが、見学地について全体、といっても7名ですが、全員に対する説明はほとんどありませんでした。着いた時にきちんと説明されていたら誤解せずにすんだのにといい思います。

ドライバーには感動しました。狭い道、ごったかえす人込み、何と上手くさばっていくのか、毎日、運転手は変わったけども、そのプロとしての技術には感心しました。ネパール、カトマンズ、地震で大きな被害を受けて、その再建に取り組む街の姿、活気ある人たちの姿、感銘を受けたところも多々ありました。しかし、このツアーはスタディツアー、ねらいもしっかり書かれてあります。このねらいは達成できたのでしょうか。

これまでネパールに再々行かれています方や、日本からの受け入れをされている方にとっては、こういうツアーもある、という感覚ではないかと正直思いました。しかし、自分にとっては初めてのネパール、せっかく行くのだから、さまざまなことを見たいし、学びたいという思いで参加しました。書き足りませんが、さまざまな場面で残念な思いの残る旅というのが率直な感想です。



## ネパール スタディツアーに参加して 長嶋 修子

インドやネパールのチベット難民の学校には、これまで参加する機会はありませんでしたが、取り巻く環境・状況はだんだん厳しくなっていることを実感しました。改めて「現状を知る、事実・実態を知ること」の大切さを感じています。

アムネスティの活動をしていた頃、「良心の囚人」への釈放や待遇改善、死刑廃止を求めて、葉書に関係国・関係機関に送っていました。こんな事で声が届き、待遇改善に繋がるのだろうか？という思いがありましたが、今回訪れた人権擁護施設の方達から「遠い所から来てくれたこと、関心を持ってくれること」への感謝の言葉を聞き、「こういうことが起こっている！ある！世界中の人が注目していますよ」というメッセージを届けること、送り続けることが大切で、大きな励み、意味のあることなのだ、再確認しました。

人身売買や HIV/AIDS の押寄せにある貧困の問題、難民・難民指定を受けられない人達(国籍が無い)存在があること、これはショックでした。「人権擁護」の問題には、「人が人の存在」をどう観ているのか？という根本が問われている問題だと思います。自分の生まれた国で暮らせない、心の自由(宗教や思想)、言語が「力」で制限されたり、奪われること、民族・人の存在が認められないこと、自分の意思を持つことや選択が自由にできないこと、人が望む場所に居場所や生きる方法がないというのは本当に辛く、悲しい、深刻な問題だと思います。

人がどういう状況にあるのか？知る努力をしていくこと。

人の痛み鈍感・無関心であってはいけないと思います。

人の中にある「感性」から考えない限り、この問題は存続し続けるのだろうと思います。



HIV/AIDS の施設を訪れた時、「涙を力に！をスローガンにしています」という言葉は深く響きました。自分自身の心の傷、無力感、家族との関係や社会からの眼・たくさんの困難、克服すべき壁があると思います。それを支えるスタッフの温かい眼や寄り添う姿勢を感じ、救われました。

今回、チベット難民の学校の寮に宿泊させて貰ったことはいい体験でした。ダライ・ラマの「人格形成・・・生活に必要なことを学ぶ」という精神の柱が感じられました。子供達の生活ぶりから「自主性や規律」が感じられ、機敏に動いている姿や自由時間に見せてくれる人懐っこい笑顔や話しかけにとっても心が温かくなりました。決して前途洋々ではない、むしろ取り巻く環境は厳しいと思いますが、前を向いて、一生懸命学んでいる姿に、心からの応援、支援を継続していきたいと思っています。それにしても、子供達の生活のシンプルなこと！荷物の少なさ、リサイクルを徹底していることには学ぶことが多かったです。子供達の努力が報われる環境、情勢が明るい方向に向かって欲しい願わずにいられません。

たくさんを感じ、考えさせられたスタディ・ツアーでした。



## JIPPO ネパールスタディツアーに参加して

林 敬子

ネパール、カトマンズを訪れるのは、今回で三回目、前回訪れてから10年以上経っており、しかも、3年前に地震を経験している為か、町の様子がすっかり変わっているように思えた。元々、忙しさと喧騒の混じり合った都市であったが、今回はその交通量、特にバイクの多さから、より忙しくうるさく感じた。街全体が埃だらけで、街路樹や道端の草木、花までが埃に塗れていた。その埃だらけの通りは、ネパールの人々にとって、ごく当たり前の事なのだろう。信号の無い通りを、仕事に急ぐ、大量の車やバイクが通る。

今回は、前二回と違った目的だったので、ネパールの一部、カトマンズの一部だが、人々の日常に触れる事ができたような気がした。

そんな中、最初に訪れたゴカルナのナンギャル中・高等学校は私にとって、本当に印象深いものとなった。カトマンズのホテルから一時間足らずの、小高い丘の中腹に建っている学校であった。この学校は男女共学で、ヒマラヤ山脈に散らばったチベットの人々の子女が親元を離れて在学していた。皆、勤勉で本当によく勉強しているように思えた。この学校はダライラマの願いの籠った学校で、必修科目の中に、仏教、チベット語とチベット文化が入っている。私個人は、チベットが中国に侵略(?)され、ダライラマ法王は23歳でインドに亡命せざるを得なかった事、チベットと言う国が消されてしまった事などを、とても残念に思っていたので、この学校の存在と理念は、私にはチベット再興の希望に思えた。現実的には、現状維持以上のものは望めないだろうが、それでも、チベット仏教、チベット語、チベット文化を受け継ぐ者の存在は私の心を軽くしてくれた。ここの授業は英語、教科書も英語であった。彼らは英語でコミュニケーションができ、私たちを快く迎えてくれていた。

この日は、先生たちがストをしていて、出勤せず、授業は見られなかったが、そんな空いた時間も生徒たちは自習をしていた。寮生活と言えば、個室か二人部屋位を私たちは考えるが、彼らにはそんな部屋は無い。大勢が二段ベッドで一緒に休む。所持品はリュックに入れて、常に持ち運んでいるようだった。

学生たちの一日は忙しい。起床は6時、身繕いをし、6時半からお勤め、仏さまへお参りするのだ。それから、朝食、食事が終わると、後片付けする者、掃除をする者等、それぞれ分担が決まっている。係でない者は自習をする。私には、やる気のない者はいないように見えた。家が遠い為、一年に一度くらいしか家に帰らない子もいる。食事の後片付けで感動したのは、食器を洗った後、洗い場を完全に綺麗にしないで、そこに食べ物のカスを残しておく。みんなが、いなくなったら、カラスを始め、いろんな鳥が来て、それを食べる。大げさかも知れないが、いろんな命が繋がっているし、自然な形でサポートしているのだと感じた。穏やかな空気が流れているように思い、根本はチベ

ット仏教なのかなとも思った。いろんな子が、休憩時間に学校の中を案内してくれた。女子は内気で、あまり話しかけてこないが、男子は皆、元気で朗らかだった。教育の必要性、重要性を彼らの両親が尊重していることを嬉しく思った。

その日は、私たちも生徒に交じって寮に泊めてもらった。一晩を共に過ごす、生活パターンが見えてき、より、親しみを覚えた。短い時間であったが、若者たちと交流でき、楽しい時間を過ごした。ナンギャル中・高等学校の後訪れた学校は、小さな子から、高校生ままでいて、しかも、父兄会をしていたので、時間的なゆとりもなく、誰とも交流できず、只、訪ねただけという印象である。多分多くの親がいたので、親許を離れて来ているナンギャルの生徒たちとの環境差が気になったのであろう、印象が薄かった。



今回のネパール訪問のもう一つの目的は、貧困ゆえに、人身売買の対象になった女性たちを救助し、社会復帰に向けての手助けをしている団体、シャクティ サムハと売春させられ、エイズに感染してしまった人たちを支援している シャクティ ミランサマージュの訪問である。中原さんと言う日本人の方が彼女たちの救出に携わっておられ、彼の話だと、其々が抱えている問題を根気よく一つずつ解決しながら、救出するそうだ。話を聞いていると、時代劇の中の女郎屋とヤクザみたいな感じであった。女性たちは時にはインドに売られて行くそうで、ネパールならネパール警察、インドならインドの警察に協力してもらって、救出するそうである。彼女たちを救出した後、ある程度の人権教育をしてから、可能なら、家族の下に返すそうである。その後、再び、被害に会わないよう、フォローして面倒を見ているそうである。ネパール政府は人身売買の被害者を認めたがらず、被害者(殆どが子ども)を中々助けなかったそうだ。HIV 感染を恐れたのも救助しなかった理由の一つである。被害者は殆ど女性、だが、母子感染の若い男子もいた。夕食を共にしたが、言葉の壁があり、余り話せなかった。彼女たちの淋しそうな笑顔が気になった。売春は援助交際と言う名前で、日本にも存在するであろうが、人身売買は貧困が原因と言えども、あつてはならない事だと思える。ルンタ プロジェクトはネパールから人身売買を失くしたいという願いの下、立ちあげられている。多くの人の理解と協力を望むところである。現在、基金を募集中である。より多くの人々の協力を、望みたい。

ナンギャルの生徒たちにもこの現実を知って欲しいと思う。自身のために努力すると共に、過酷な現実には耐えている人々がいるという事も脳裏に刻んで欲しいと思う。

カトマンズーの知人(ネパール人)にこの事を知っているかと聞いたら、知っていると言っていた。少しずつでも、ネパールの人たちが、自分の事として、この問題に取り組んで行ってほしいと思う。私たちも様々な問題を日常的に抱えているが、其々が、悲しくない人生を送れるよう、お互い協力して行きたいと強く思っている。

## ネパール・スタディツアーを実施して JIPPO 事務局 高木 美智代

まずは、今回のツアーが大きな事故なく終えられたことに感謝し、ツアーに関わってくださった全ての方にお礼申し上げます。

このツアーのきっかけは、龍谷大学アジア仏教文化研究センター(BARC)が2016年12月に実施した「仏教者による社会貢献活動の実態と意義」のワークショップでした。JIPPOは運営協力として、パネリストに、ダーナインターナショナル(DIC:浄土真宗本願寺派僧侶らで組織するチベット難民を支援する団体)の事務局を務める広島県庄内市 西楽寺の定光大燈さんを推薦し、30年にわたる活動を語っていただきました。定光さんは高齢化するDICを活性化させたいと尽力されていたことから、龍谷大学実践真宗学の学生がチベット難民の現状に関心を寄せてくれることを期待し、このツアーを計画しましたが、残念ながら龍大生の参加は無く、その点においては計画倒れとなってしまいました。どうやって関心のある学生を見つけ出すか、もしくは関心のない学生をどうやってひきつけるか、普段からの働きかけやインパクトのあるアプローチを考えなければいけないと痛感しました。

今回、JIPPOとして、また私自身、初めてネパールを訪れました。ネパールは域内最貧国のひとつで、多くの外国の支援が入っている国です。また、国の経済も30%近くが出稼ぎ労働者からの海外送金で支えられています。人身売買の問題もそうした国内で経済が成り立たない状況が招く悲劇です。ネパールは「支援慣れした国」といわれることも多く、私自身ネパール人の不法就労の問題に関わったことがある経験から、これまでネパールの印象はバイアスがかかっていた。しかしネパールのインフラ状況を目の当たりにし、人権問題に必死で取り組む人々や、精一杯私たちの希望をかなえようと走り回ってくれたガイドのミミさんと共に時間を過ごす中で、外側からの支援に頼らざるを得ない中、必死で生活をつないでいるネパールに親しみと尊敬の気持ちが芽生えました。一方でたった数日間でも、社会に根深く残る民族間の不協和音、カースト、汚職などが垣間見え、ネパールで協力活動を行う難しさを肌で感じました。

チベット難民の学校は比較的恵まれた環境でしたが、生徒の生活は大変つましく、勉学に集中する環境に徹していました。またリユース、リサイクル、生ごみの堆肥やバイオガス利用の仕組みが学内に定着していることに驚きました。ネパールの中で彼らのような人材が生かされたらどんなに素晴らしいでしょう。

「シャクティ・サムハ」や「シャクティ・ミランサマージュ」は、女性人身売買の被害者自身で組織する保護、更正施設であることに大きな存在意義を感じました。彼女たちにごそ一流の職業訓練と安心して暮らせる住居が必要です。影に追いやられてしまいがちな弱い人々が声を上げる勇気を、私たちは称え、皆で問題を解決していく社会を築きたいと気持ちを新たにしました。



ナンギャル高等学校



ソンチェン プリクティ寄宿学校



シャクティ サムハ



シャクティ ミランサマージュ



Atisha Primary School



ホテル ターメル